

令和 5 年度 中干し指導会資料

「中干し・溝切り・ケイ酸の活用」で気象変動に負けない稲作りを！

今回の指導会のポイント

- ① 中干しのタイミング・程度
- ② 中干しと併せて溝切りの実施
- ③ ケイ酸施用で気象変動に負けない稲作り

1) 中干しについて

中干しには、「過剰生育の抑制」・「土中への酸素供給」・「地耐力の向上」などの効果があります。どの効果についても最終的には収量・品質に大きく関わるため大変重要な作業と言えます。

① 中干しのタイミング

中干しは、田植え後 30 日後には実施しましょう。また、より精度が高い判断基準としては茎数を数える方法があります。

中干しの期間は 2 週間を目安に実施しましょう。

【茎数で判断する中干しのタイミング】

- ・ 60 株植えの場合 ⇒ 15 本
- ・ 50 株植えの場合 ⇒ 18 本
- ・ 45 株植えの場合 ⇒ 20 本

【参 考】

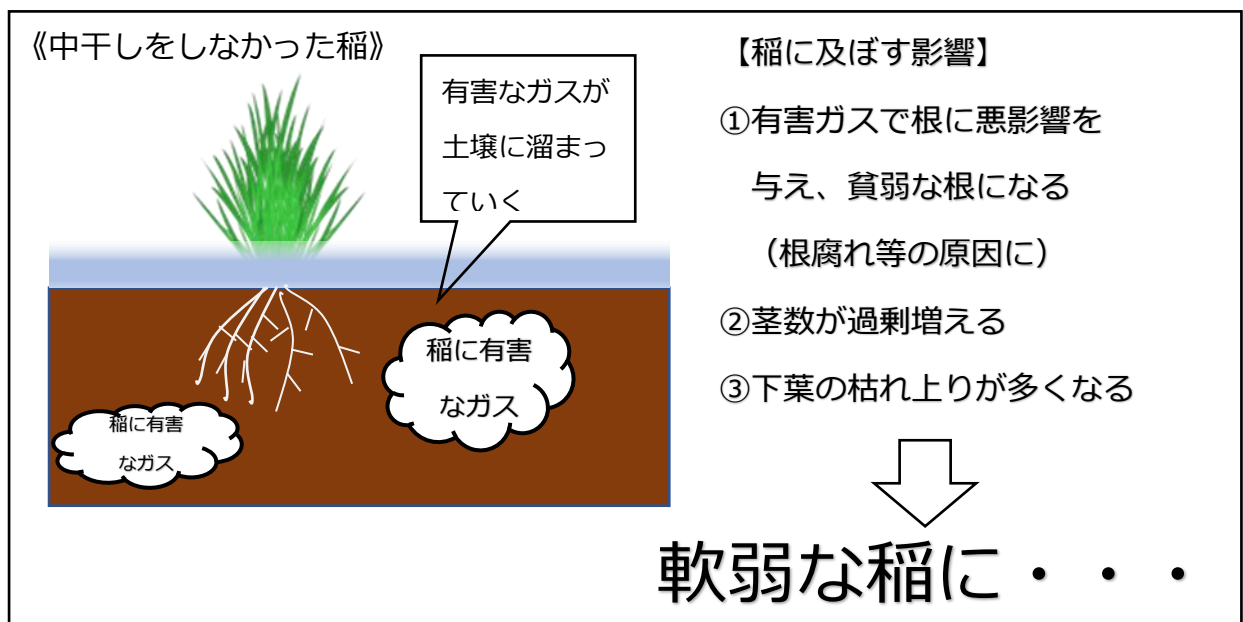
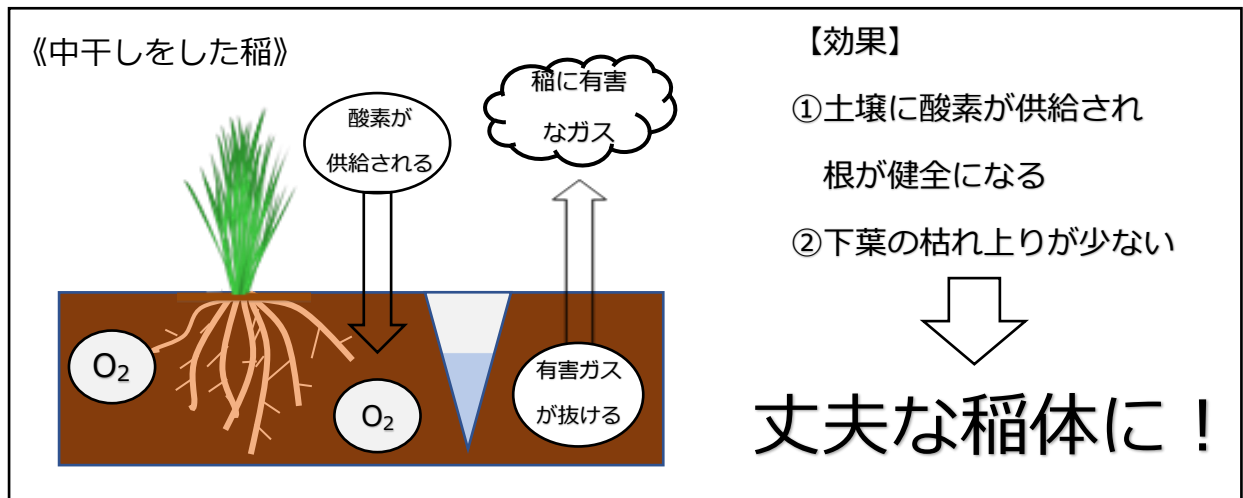
目標穂数 350 本/m² × 0.8 ÷ 栽植密度 (株/m²) = 中干し開始目安茎数

② 中干しの程度

中干しの程度については栽培するほ場の「地力」、「保水性」、「用水確保の容易さ」で判断します。

※詳細につきましては別紙をご参照ください。

③中干しのイメージ



2) 溝切りについて

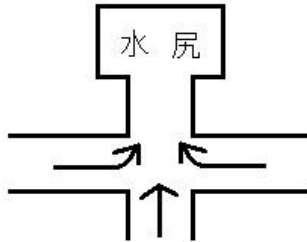
溝切は田んぼの中に溝切機で用排水路をつくり、今後の水のかけひきを容易にするための作業です。

【ポイント】

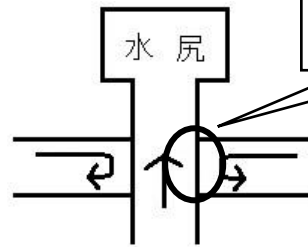
- ①ほ場の周囲に溝を切る
- ②溝切りの本数は8～10条に1本を目安に溝を切りましょう。
- ③溝と溝をしっかり連結しましょう
- ④排水の良い所や田面が高い所は切る数を少なく、排水の悪い所や田面が低い所は多く切ります



◎ 良い溝切り



× 悪い溝切り



溝と溝をしっかり
連結させましょう！

3) 中干し後の水管理

中干し終了後は浅水の間断かん水を実施し、徐々に飽水管理へ移行しましょう。

※急激なかん水は根の酸素不足による根腐れや下位葉の枯れあがりを生じさせやすいので注意しましょう。

- ・ **間断かん水**：湛水状態と落水状態を数日間隔で繰り返す。
- ・ **飽水管理**：水尻は止水し、自然減水で田面の水がなくなり、溝や足跡のそこに水がたまっている箇所が散見される状態になったら、かん水する
飽水管理のイメージは田面が中干しの時の様に白く乾くことはなく、黒く湿っている状態を保ちます

4) ケイ酸資材について

稲はケイ酸を多く消費する作物です。水路が整備される前までは土水路の用水にも稲にケイ酸が多く供給されていましたが、パイプ灌漑とともに水に含まれるケイ酸含有率が少なくなっていました。また、もみ殻堆肥の投入も減っています。

そのため、ケイ酸資材の施用や、もみ殻・稲わらの活用はより重要なものとなっています。

《ケイ酸の効果》

① 光合成が促進される

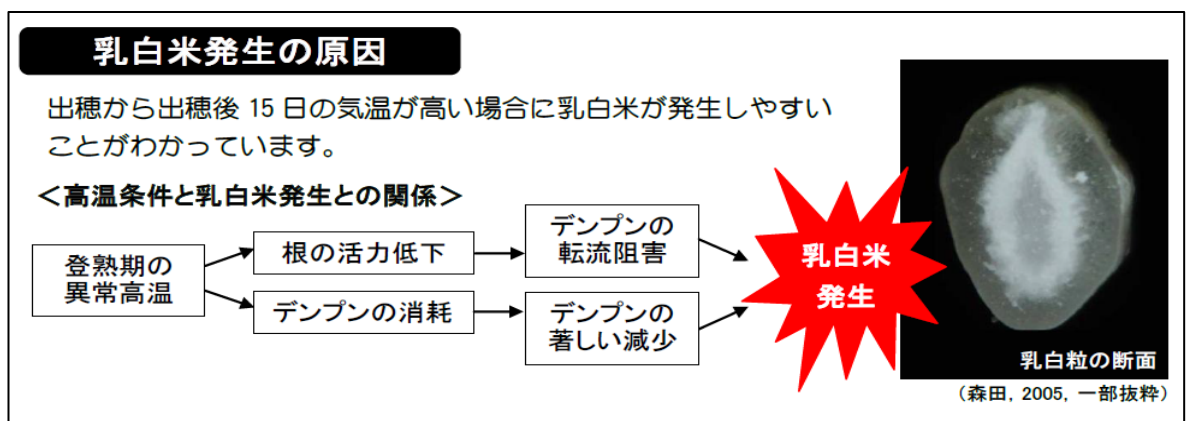
- ・ 光合成が促進されることで茎や葉が丈夫になり、風害に強くなる
- ・ 稲が硬くなり病原菌の侵入や害虫による食害が軽減される
- ・ デンプンの転流が促進され、食味向上につながる

② 高温障害に強くなる

近年では猛暑となる年が増えてきているため、高温障害による品質低下が懸念されます。

一方、ケイ酸施用することによって根の活性は高まり、蒸散が多くなるため、イネの体温が高くなるのを防ぎ、光合成を盛んにすることで、「乳心白粒」の発生が軽減されます。

《 参 考 》



～ 年に 1 回ケイ酸分の補給を心がけましょう！！～

別紙

中干し程度の判断基準

程度
中干強く

中干し弱く

用水	保水力	地力	中干し程度	ほ場の状態
◎	◎	◎	中干しは強め	表面が白く乾き小ヒビが入る程度 ※大ヒビが入るまでは干さない
○	○	○	中干しは並み	表面が黒く乾き小ヒビが入る程度 ※大ヒビが入るまでは干さない
○	○	△		
○	△	○		
○	△	△		
△	△	△	中干しは弱め	ヒビが入らない程度の黒乾き ～ 足がぬかるむ程度

判断基準	
◎	ある
○	並み
△	少ない